

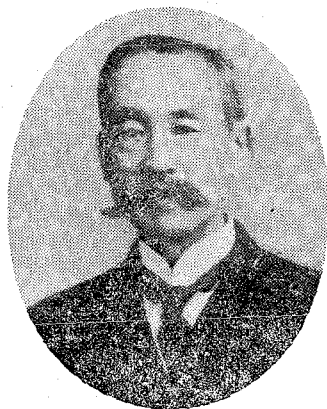
説苑



道路改良會首腦部と道路問題の推移

副會長石黒五十二氏

清水生



博士も宇宙の大原則に従ふ
 本題の「道路改良會首腦部と道路問題の推移」を書くには本會が創立以來副會長として終始活動され以て多大の功績を残された工學博士石黒五十二氏のことはどうしても書かねばならぬのである、博士は他人から阿彌陀堂と呼ばれて居たそうだが既に涅槃經の……諸行無常、是生滅法、生滅滅已寂滅爲樂……即ち天地間のありとあらゆる生物は必ず死を免れないのであつて諸行無常是生滅法である。そうして無常道に歸つて寂滅縁を結ばないものはないのである。例へ

ば春は花は時を得て匂ひ咲くが、時を來れば今迄の絢爛さへ何所へやら空しく散り失せるのである。人間の世でもその通りであつて、明日は明日こそはと幸福を見出さんとあせつても、さてそれが日一日と死に近づきつゝあることは絶對の現實であり亦眞理である。更ればこそ佛語の所謂生者必滅こそ宇宙の大原則であつて、その根本は萬古案れなるところの因果關係から發現してゐるのである。石黒五十二博士もこの宇宙の大原則……生者必滅の例には漏れず、去る大正十一年一月の十四日に既に現世を去られて、淨土に安住してゐられるが、先づ博士の略歴を見ると、

博士は安政二年六月に舊金澤藩士石黒千尋氏の二男として東京即ち當時の江戸に生れる。當時の世情は國家は萬世一系の皇位を中心として強大なる一大團結を形ち造るべく、尊王攘夷と佐幕とに分れて王霸兩電相搏つ時代であつて、世は轟々として馳て幕府は没落の運命を辿る下に置かれて居つたときであつた。博士はこの時代に生を享けて世は萬人の熱望する王政復古となり皇恩が四海

に洽ぬくに至る、明治十一年に東京大學の工學部を卒業してゐる、翌十一年には更に進んで工學を修業のために當時先進國である英國に留學して、彼地に滞在すること約三ヶ年に亙つて英國工學院やケンブリヂ大學や其他で營雪の功を積んで M.O.C.E. の稱號を受けて明治十六年五月に歸朝したのであつた。

始めて官途につく

而して博士は英國から歸朝後間もなく古市公威博士の手引きに依つて内務省の御用掛を命ぜられて茲に始めて官途についたのであるが、翌十七年には文部省の御用掛を兼務し、更に東京帝國大學理學部の講師を依頼せられて理學部の教壇に立つて新進の智識を傾倒して土木工學を學徒に講義をなして居たのである。明治十八年に内務省四等技師となり翌十九年には海軍省技師を兼任して居たが二十四年には工學博士の學位を授與されてゐる。更に三十年には土木監督署技師となり同三十一年には海軍省の技師となつて、大いに我が海軍の技術的方面に盡瘁す

るところがあつたが、明治二十九年に至つて後進に途を拓くために願に依つて官界を辭して野に下り民間事業に關與して居たが、四十年に過去の功績に依つて貴族院議員に勅選せられてゐる、更に翌四十一年には錦鷄間祇候を仰せ付けられてゐる、この間博士は鐵道會議員震災豫防調査會委員道路會議々員東京市道路評議會議員等々と幾多の公的事业に關與して居る又三池築港、宇治川水電等の各計畫を依頼せられて民間の事業にも顯著なる功績を擧げてゐるが前記したやうに大正十一年一月に薨去されたのである。

これが石黒博士の略歴である。博士は嘗つて道路改良の問題に關してかやうなことを述べて居れるが。

抑々道路の歴史について云ふとなか／＼夥しい歴史を持つて居るのであつて、これは獨り日本のみならず、世の進歩するに従つて道路の改良の必要なることを益々認め來たのである。歐米各國に於ても時代に從つて道路の構造が變つて來ると云ふことを述べると長くなるからこ

ゝでは省略するが。

と、前提して。我國の過去の道路の經緯に及んで。

我國の最近二三百年間に於けるところの道路は一つに交通機關と云ふ使命を持つて居たと同時に封建各藩割據の時代に於いては道路を現在の如く國防上の必要又は其他産業上或るひは交通上から良くするといふにあらずして寧ろ道路の嶮惡なるものを以て其の國、其の藩の交通機關にあらざる、城砦的の國防用具となしたと云ふ形跡は各所に在るのであつて、例へて見れば、徳川時代に於いては江戸にその政府があるに拘らず箱根八里の嶮岨と云ふものは今日之れを見ると他に道路を開くことも出來たのであるが、特に彼の嶮路を選んだ形跡があるのであると博士はあの……箱根の山は天下の嶮關谷間ものならず……と歌ふ箱根八里の難路について屢々詳細に述べて、次いで更に封建時代の道路に關して、所々の例に及んで。

清正道路とは

加賀越中の境なる俱利伽羅峠の一騎打ちなどと云ふもの

は、これも他に良い道路があるに拘らず、殊更に曲折峻坂の悪路を選んだと云ふことは、之れも軍略上のことからである、又九州地方では殊に有名なる清正道路と云ふものは今日見るところの塹壕式になつてゐる、これ亦一方から見れば交通上の用のみにあらずして、有事の際に於ける軍略上の用に供したといふことがあり／＼と残つてゐるのである、然れども世の變遷に従つて道路の選定及び其の構造法と云ふものは必要に應じて變つて來るのであつて、我國に於ても殆んど三十年來の懸案であつたところの道路法も第四十一回の帝國議會に於いて貴衆兩院を通過した結果大正八年に道路法を發布になつた次第である、夫れで道路構造上における所の有ゆる規程其他が設けられたのである。

と、道路法の制定について語つて。道路改良の利益……現在では文明の利器、交通上の利器たる自動車を用ゆることとなり、従つて迅速に交通運輸の目的を達するためには、只を單に道路の幅員が廣いばかりでは能でなく、

又勾配の緩なるものばかりが能でなく、或は路面の滑かなるもののみを以て宜いとは云へないのであつて、斯くの如きものを全部改良すると同時に路面をして堅牢なる構造にすることが最も必要である、即ち換言すれば堅牢なる道路が最も必要である、道路が堅く良くなれば經濟上にも又交通上等の點のみならず、塵埃其他が風のあるときに散亂するといふことが尠くなり、自然衛生上から觀察しても必要である、又運搬に於ても道路が堅牢なれば各農家等に於いても農産物を市場に持ち運ぶに便利なるがために安價なる多量食料品が相互に得らるゝこととなり、其他有ゆる物資交換上運輸其の他に對して必要となるのである。かゝる點があるが故に道路改良會の當事者達は、この點を深く考慮して同志相集つてこの會を組織して以て道路改良を極力宣傳してゐるのである。

飛行機襲來と道路

と博士は堅固なる道路建設の必要を有ゆる角度から説いてこれは餘談であるが参考までに云ふと……今回の歐洲

大戦亂「曩の歐洲大戰を指す」に際して、飛行機の襲來と云ふことがあつたが、丁度私は英國で開催の萬國議院商會議に貴族院から委員の一人として參いてゐたが、其の間に敵の飛行機の襲來があつたので私は英國に於いて實際に目撃したが、時は恰も夕刻で丁度鴨が池から田圃に向つて餌食に飛び立つが如く途がきまつて居るために英國ではバラージと稱して飛行機を討つ大砲を常に敵の飛行機が通過する所の海岸に垣根の如く一列に備へ附けて置き、これで飛行機が來襲すると一時に打ち上げたのである。ところが獨逸軍でもこの砲撃に度々出會ふので、更に方面を轉じて平常通つて來るところを通つて來ないことが屢々あつたのである、英國も亦斯くの如きことがあらうと云ふ考を持つて、豫めその用意をなして海岸の道路は戦争が始まつて以來餘程注意して改良を加へてあつたが故に、飛行機襲來に對して飛行機が見える前に且つ又人間の耳に飛行機の音が聞える前に所々見張を置いて電氣装置を以てロンドンの本部へ信號する様に

なつて居り、即ち赤い信號電燈、青い信號燈に依つて飛行機襲來の方向或は方向轉換の方面を知らせる、更れば飛行機の襲來の方面に自動車をも以て恰も消防隊がポンプを運ぶ様に、射撃砲を迅速に運んで飛行機を砲撃したと云ふことである。……私がこのことを云ふのは斯ることまでに堅牢なる改良された道路の必要があると云ふ事を參考までに云ふのであつて、道路改良の必要は獨りこれのみに止まらず、社會上經濟上必要なることは茲に多言を要せないのである。

茲で博士は道路の改良は將來益々必要であることを力説して。そのあとに。

道路を造るばかりでは何等の効果なく、これに伴うて保存と云ふことも必要である、即ち換言すれば道を愛護する觀念がなければならぬ。又快速力の自動車の使用に伴ひ交通の頻繁になるに連れて各人が異々道路通行に餘程考へを持たなければならぬのである、完全なる道路を造り文明の利器を使ふ様になつた上に於ては、其の路

面を通行するに大なる注意を拂はなければならぬのである、道路改良助成策の概要と道路改良によつて得るべき種々なる利益をこゝに紹介したのであるが、斯る有益なる事業に對しては獨り國家の施設のみならず、國民自から誰でも之が改良發達に盡さなければならぬのであると石黒博士はかやうに懇々と道路改良の必要を説いてゐる

博士と道路改良會の活動

回顧すれば去る大正八年の春道路改良會が創立されて、會長には水野鍊太郎氏を推し故澁澤子爵、故床次竹二郎の兩氏は顧問となり、博士は當時内田嘉吉氏と共に副會長に推薦されて以來大正十一年一月に薨去せらるゝまで、約四ヶ年餘の永きに於いて銳意本會の發展とその使命達成に努力せられた功績の偉大なるについては今更茲に多言を要せないのであるが、本會が道路の改良に付き博士等の指導に依つて活躍したる主たるものを見れば、先づ本會創立直後に於て東京市路面改良計畫の調査を始めとして、これが實施を建議すると共に東海道並に山陽道四國九州の各國道の

改良計畫の調査を完了して、當局の參考に供すると同時に廣く道路關係者にこれ等地方の道路改良計畫の調査を配布したのであつた。又他面に於ては調査部を設けて道路に關する法制、經費、稅制、經濟、技術、線形、衛生等有ゆる方面から所謂道路問題の基本的調査研究を行ひ或は道路事業の實際に携はるゝ者のためには斯界の權威者等を招聘して時々講習會を開設して以てその實力の養成に勉め更に各地にも道路改良に關する講演會等を開催して道路問題に對する世論の喚起に力を致すなど大いに努力するところあつたが又時に臨んでは道路問題殊に經費の點等につき政府當局に披陳してその考慮を求め或ひは社會の推移發達に伴うて道路問題に相關連して單行印刷物を頒布してこれを世上に紹介をなし、更に機關雜誌を發行して各種の研究と事業の實績等を明かにして以て絶へず道路改良の普及宣傳に勉むることとなし、又は海外視察員に依頼して海外道路の近情を調査する等々は本會は過去及現在に於ての事業の主なるものである。殊に道路計畫は交通の現勢に則して將來を

十分考慮してこれが樹立を計る要あるを以て、各地交通の情勢は本會に於て臨機これを調査しつゝあるも全國交通の大系は時を同ふしてこれを施行して始めてその状況を察すべきことの必要を認めて全國に互つて一齊に調査を實施したのであつた。殊に我國の幹線道路とも云ふべき東海道の道路の如きは鐵道の開通に依つて往昔の彼の五十三次は次第に衰微を來たしたのに連れて道路の状況は當時何等改良の迹を見ざる有様であり亦山陽道の道路の如きは尙一層甚だしき状態なるを以て、これでは我國の幹線道路たるの價値は忘却せらるゝのみならず、延いては交通産業の發達上由々敷問題なりとの所以を以て本會が主催となつて

東海山陽の道路實地視察

先づ東海道全體に互る道路の實地視察を計畫したのであつた。當時博士は本會の副會長として自からその陣頭に立ちて當時常務理事であつた、堀田貢、理事近藤虎五郎、松木幹一郎、幹事佐上信一、牧彦七、田中好、岡野碩氏等に當時内務省土木局の技師であつた比田孝一氏等と共に自動

車に分乘して、大正八年十一月東京市大手町を發して先づ品川に向ひ夫れより箱根の嶮路を越へて静岡、名古屋、大津、大阪と順次各都市を経て神戸に到つたのである。その間東海道幹線道路の現状を具さに視察すると共に自動車を通する能はざるところはこれを避けて自動車を鐵道に托送して漸くその前後を聯絡する等のがあつたが、爾來この實地視察を資料として攻究を重ねて理事會の議を経てこの調査を當局に建議し又は公にしたりしたのであつた。博士は終始熱心に關與して、大いに盡瘁するところあつたのである。現在では箱根、鈴鹿の嶮道も自由に自動車の快走が出來得ると共に富士大井其他の大橋も既に竣成して、次いで京濱、阪神、京阪、名阜等の大道路も路上交通の殷賑を來たして東海道全線改良の實績は大いに見えるべきに至つたが、當時は未だ東海道幹線道路さへかやうなる状態であつたのである。更に山陽道もまた東海道の實地視察に倣つて自動車踏査をなすことに決して博士は幹事松本學、牧彦七博士鐵道事務官細野躋、田中好氏等と共に自動車を連れ

て沿道各縣の援助の下に大正十年七月盛夏に神戸市の中心にある相生橋を出發して、岡山、廣島、山口の各宿泊地を経て下關市に到着したのであつた。大體この旅程百三十三里餘であるがこれに依つて山陽道に於ける道路を亦詳細に實地視察を遂げ、而してこれ等の實地踏査の結果も本會調査部にて、調査研究せる四國九州各地に於ける道路改良計畫と併せて再調査をして世上に公表して以て漸次改良の事業計畫に資するところ甚大であつたのである。博士は斯くの如く道路改良に對しては頗る熱心にして常に努力を吝まなかつたのは敬服するところである。

道路改良の恩人

衆議院議員田中好氏は博士について。

石黒五十二博士は大正八年三月一日麴町區外櫻田町の内務大臣官邸で道路改良會の發會式を舉げて以來副會長として會のために非常に活動された人である、勿論博士が官吏生活中にも頗る功績を擧げられて居るが又民間事業についてもあの三池築港の計畫者として或は宇治川水

電の計畫と云ふ頗る澤山の事業が残されてゐる、現に博士の功績に關しては關西商工業界に今以て囃されてゐるのを見て明する位である。嘗て道路改良會が舉行した東海道や山陽道の道路改良に資するための實地視察や道路改良宣傳等には老軀を顧みず常に先頭に立つて活動されたのであつてまた京都や長野等の縣下における道路改良の宣傳等にも矢張り講演して道路改良の必要を力説されたものであつた。

と、氏は博士が道路改良のために熱心であつたことを縷々述べて。

山陽道の旅行のときなどは箱型の自動車に乗つて一行を指揮されたので誰れが言ふともなく阿彌陀堂と敬稱したなどは今尚ほ同行のものゝ話題に登る位である。博士の言ふところは一體道路改良と云ふことは國民經濟のため絶對必要であつて従つて政黨政治を超越して何れの内閣でも之を計畫し實行して呉れゝば十分だと言ふ意見であつて従つて後ちに貴族院の政黨に身を置かれた博士と

しては不思議な程の意見を持たれた、山陽道の道路も今は漸次改良されて博士が八ヶ間敷力説された所謂長關國道なども立派なものになつてゐる、博士も亦地下で快欣をされて居るだらう。

と云つてゐる「斷つて置くが田中代議士が石黒博士についてかやうに言つたのは昭和五年である」がこれを見ても、繰返して云ふまでもなく、博士は我國の道路の状態は近時に至るまで他に比較して其の進歩發達は最も遅れ、従つて道路交通と輸送關係等に於て遺憾の點多々あつたのみならず、將來自動車と云ふ文明の利器の益々發達につれて道路の改良を完備させねば一國の産業經濟状態はその發展を阻害せらるること多大なるを力説して以て道路の發達と改良について甚大の努力したかを窺はれるのである、茲に筆者は博士は我國に於ける道路改良の恩人と云つても敢へて過言ではないと思はれるのである。

博士と河川土木事業

亦博士は河川土木事業についても多大なる貢獻をなして

ゐる。元來我國の河川工事は明治維新前に於いては沿川に幕府領、藩領、旗下領等々あつて恰も大牙錯雜其の境を接するといふやうな状態にあつて、且つ河川の狀態は自然的以外人爲的にも惡化して、年々夏秋の交に至ると必ず莫大なる水害が伴ふの有様であつたが、維新の以後に於いては一般國土の保安上重大なる利害關係を持つ河川に對して政府は統一せる治水策を樹立して、これが直轄施行する方針を執つて明治五年和蘭から長工師ファン・ドールン氏を始めとして數多の工師を招聘して淀川を始め漸次に利根、信濃木會、北上、庄、阿武隈、最上、阿賀野、富士、大井、天龍、吉野、筑後の諸川の改修工事を直轄施工することゝしたのであつたが、當時に於いては各河川共に調査實測等の資料もなく只だ漫然と改修の大計畫を立てるより他に良策なく、殊に蘭人の工師等は故國の河川工事の印象に慣れて改修計畫は自然河身の改良舟運の便利を主として、洪水災害の防止を従とするの傾向があつて、即ち實施された淀、木會信濃の各川等に於いても水源山地の砂防工及び各直

轄河川の低水工事であつて専ら土砂の流出を防ぐとともに水制工護岸工等を施し以て亂流を防いで水路を調整するに止まつた位であつた。然るに明治十三年頃からは我國の土木技術界の大先輩であつた。古市公威博士を始め石黒博士其他沖野忠雄、山田寅吉、田邊藤三郎の諸氏は海外から續々歸朝して内務省に奉職するに至つて、茲に我國の治水事業は蘭人工師の手を離れて我國の技術者の手に移りその治水計畫は水害の防止と河身の改良とに相俟つて我國の實情に適するやうに計畫したのであつた。而して治水關係または技術的には各重要河川の改修計畫を決定し、更に行政的には河川法、砂防法等の制定を見て以て我國の治水政策の基礎を確立したのである。當時博士は古市公威氏の下にあつて技術方面に於いて多大の貢獻を示してゐる。

一 土木工學研究の機關設置

更に博士は日本土木學會の設立に際しても先輩たる古市博士を援けてその創立委員として大いに盡瘁するところがあつたのである。當時世界の工學界の現状を観察すると各

専門家は競ふて斯學の研鑽に従事して孜々と倦むことなく各自の研究實驗の成績を發表する機關が多々あつたが我國としても即ち學會を設立して斯學の進歩發展に力を致してゐる有様である、即ち我國に於いても機械、電氣、建築の如き各専門の學會は既に設立されて研鑽を怠らないのに拘らず土木學科に於いては其人に乏くはなく且つ事業そのものも亦尠くないにも拘らず、當時未だ土木學會の設立を見るに至つて居ないことは工學界の一大缺陷であるとされてゐたのであつた。茲に於いて古市沖野兩博士や石黒博士等はこれが設立主導者となつて大正三年に該學會の創立を見たのである、當時會長には古市公威氏が就任して沖野忠雄、野村龍太郎の兩氏は副會長となり、博士は近藤虎五郎、中山秀三郎、古川阪次郎、白石直治、廣井勇、仙石貢、日下部辨二郎氏等と共に常議員に推れてゐるが其後會長の職についてゐる。全體土木工學といふものは國家社會の發展並に人類の福利増進に寄與するところ大なる關係を持つ工學の一大分科であることは言ふまでもないのであつて、即

ちその専攻するところは治水道路、港灣、鐵道、橋梁、上下水道、水力發電、都市計畫、砂防灌漑、排水等總て國民の利用厚生は勿論、一國の資源の開發並に文化の向上に極めて至大なる關係を有するものであつて、殊に近時大東亞新秩序……共榮圈建設に關聯する國土計畫そのものも亦この工學の部類でないかと思はれるのである程廣範圍に互つてゐる。而して斯かる學會を創立して以て工學專修者の智識を交換しその研究するところを、又は實驗したる結果を發表討議して、斯界に關する智識の啓發に資せんとすることとは誠に緊要の事たるは勿論であつて、殊に各種の調査事項等を討究し或るひは各方面の諮問に應じて所謂我が土木事業及び技術研究に對して一般的指針を與ふる如きは誠に國家必須の機關である、これが設立に關し石黒博士の盡瘁は多々とするところである。

博士の人物を聞く

偕て前記したやうに博士は大正十一年一月十四日に六十八歳の高齡を以て他界されてゐるが、丁度この日は早稻田

の偉人として内外に知られたる明治の元勳たるあの大陸侯の國民葬の當日であつた。……筆者は某日或る學會に於いて生前博士を克く知つてゐる、一老學者に博士の所謂人となりといふやうなことをいろ／＼聞いてみたが。

石黒博士は資性活達であつて、しかも最も謙讓の徳に富んでゐた人である、人と交るにも決して城府を設けることなどは絶對にせずして、何人にも喜んで面會し、また克く語つたものであつた。殊に座談には巧みであつて容易に人を感動せしめたものであつた、思慮は緻密で用意周到とも云へるが、従つて些事と雖も疎かにはせなかつたが、例へば日記、書簡等でも必ず自から筆をとり又克く整理して聊かも亂雜のことはなかつた、突然の訪問客どなに接した場合の如きは止むを得ざる用件のある時は自分から玄關まで出て來てその理由を云つて陳謝するといふやうな有様であつた。

と博士の人と成りを話されて。

而して博士は克く部下を愛撫誘掖したものじやが性格は

堅忍不拔の氣性に富んでゐた、嘗て青年時代にあの隅田川に架設してある吾妻橋から千住の大橋まで逆遊を試みたことなどあり、また、内務省の技師時代には素足に草鞋を穿つて克く山野を跋涉してその健脚を自慢したものであつた、又或る時は横須賀で潜水艦や飛行機に搭乘したこともあつて、その饜饒と潑刺たる元氣は壯者を後へに墮若たらしむる處があつたと云へよう。家庭では最も嚴肅で儉素を旨としたが然し溫情を以て子女を薰育せられて居たやうである、七男二女の子福者で令嗣九一氏は東京帝大を卒業して實業界に活躍されて居ると聞いてゐる。

とのことであつた……全體人の傳記や人物といふやうなことを書くには例へ一度でも、その人の聲咳に接してみてこそ始めて多少其の筆は運ぶのであるが、筆者は若き時代に換弧界に身を投じてその生活約十五六年の永き間には新聞記者と云ふ職責上幾多の知名の士にも遇ふ機會を得て親しく對面するを得たが、夙に博士の高名には接してゐたが未

だ嘗て一度も面會するの機會を得なかつたから筆者自身は直觀したる博士その人の人物を描寫することは出来ないが博士が生前愍意であつたと云ふ人々に聞いて見ても前記した一老學者の云はれたことと大同小異であるから石黒五十二博士の人と成りを略ぼ窺ふことが出来るのである。茲に謹んで故博士の久遠の冥福を祈つて拙文をとめることにする。

